

2025 年度 教区宣教司牧評議会 各ブロック・小教区報告の司教総括

2025 年の京都教区における 9 つのブロックの宣教司牧計画の評価、ならびに各ブロックから提出された「一年のふり返し」「特に喜ばしかったこと」「十分に取り組めなかった課題」を丁寧に読み合わせた上で、京都教区全体の現状と課題について分析を行いました。各ブロック・小教区の皆さんが一年間にわたり祈りと奉仕を重ね、困難の中でも希望の芽を育ててくださったことに、心からの感謝を申し上げます。この分析は、単なる総括ではなく、京都教区全体が「どこに立ち、どこへ向かうのか」を見定めるための出発点です。主がこの一年の努力を豊かに祝福し、次の希望への道を導いてくださることを信じて、ここに全体の分析をまとめます。

✙パウロ大塚喜直

I. 全体総括

- ・ 2025 年度は、聖年「希望の巡礼者」を共通の軸として、①巡礼、②交流、③祈り、④多国籍信徒との交流が教区各地で展開され、「教会のつながりが可視化された一年」となりました。
- ・ とりわけ巡礼を中心とした取り組みは、教会が単なる「集まる場」ではなく、共に歩む共同体であることを多くの信徒が実感する機会となりました。
- ・ また、他教会との交流や外国籍信徒との交わりを通して、教会の多様性と豊かさを再発見できたことは、大きな恵みであったと言えます。
- ・ 一方で、この一年の歩みは、教区が直面している課題をより明確に浮かび上がらせることにもなりました。
 - ① 教会活動を支える担い手の不足、担い手の固定化や高齢化が進み、限られた人に負担が集中している現状があります。
 - ② 子どもや若者が一時的には参加しても、教会生活に継続的に関わるのが難しいという課題が依然として存在します。
 - ③ 宣教活動が年間行事の消化に追われ、本来目指すべき「福音を生き、分かち合う営み」との関係が見えにくくなっているという、宣教の方向性の不透明さも否めません。
- ・ しかし同時に、この一年の中には、次の教会像を示す重要な兆しも確かに現れています。
 - ① 子どもや若者が主体的に関わろうとする姿、外国籍信徒が奉仕の担い手として自然に受け入れられている場面、小グループで祈りや分かち合いを深める中で生まれる信頼関係。これらは、「規模」や「人数」では測れない教会の生命力を示すものであり、今後の宣教司牧の方向性を示唆しています。
 - ② これらを総合すると、京都教区に求められているのは、「教会を大きくすること」や「活動を増やすこと」そのものではありません。むしろ、信徒一人ひとりが互いに支え合い、共に祈り、共に学び、共に成長していく「担い合う教会」「育ち合う教会」への質的転換が必要であることが、今年度の歩みを通して明らかになりました。
 - ③ 聖年「希望の巡礼者」が私たちに示したのは、完成された教会像ではなく、道を歩み続ける教会の姿です。今後の京都教区の宣教司牧は、この気づきを一過性の成果に終わらせるのではなく、日常の教会生活の中に根づかせ、次世代へとつないでいくことが求められています。

II.『特に喜ばしかったこと』（9ブロック共通）

1）巡礼の効果（「共に歩む教会」を体験する力）

巡礼は、「旅と祈りを共にする体験」を通して信徒同士の連帯感を深める力を持っていることが確認されました。同じ道を歩き、同じ祈りをささげ、日常を離れた時間を共有することは、教会を「活動の場」ではなく、信仰を共に生きる共同体として再認識させる有効な媒介となりました。これは、言葉による説明や会議では得がたい宣教司牧上の成果です。

一方で、参加者数が限られたことや、巡礼のテーマが十分に実感されなかったとの声もあり、企画内容や事前・事後の分かち合いの工夫があればと思います。

2）教会が「共同体」として機能する回復

コロナ禍によって中断されていたミサ後の交わり、バザー、小グループ活動が徐々に再開され、教会が再び「人がとどまり、語り合う場」として機能し始めました。この回復は、単なる交流の復活ではなく、「祈り」と「交わり」が結びついた教会本来の姿が取り戻されつつあることを意味しています。

祈りだけの場でも、集うだけの場でもなく、祈りが交わりを生み、交わりが信仰を支える。その循環が回復しつつあることは、信徒の孤立を防ぎ、教会への帰属意識を育てる上で極めて重要です。教会が「行事に参加する場所」から「安心して身を置ける場」へと回復していることは、今後の宣教司牧の基盤となる成果であり、さらに「信仰と希望が育まれ、使命へと送り出される場」として成熟していくことが期待されます。

3）外国籍信徒の参加（教会の生命力の源泉）

外国籍信徒が典礼奉仕や行事運営に積極的にに関わり、歌や食事を通して交わりを広げたことは、多文化共生が特別な課題対応ではなく、教会そのものを生き生きとさせる力であることを示しました。

言語や文化の違いを越えて共に祈り、奉仕する体験は、信徒一人ひとりに「教会は誰のものでもなく、すべての人の家である」という意識を育てています。

外国籍信徒との共同体づくりは、調整や配慮を要する側面も確かにありますが、それ以上に、教会の普遍性（カトリック性）を具体的に体験できる恵みの場となっています。この現実、今後の教区にとって負担ではなく、宣教と刷新の原動力として積極的に位置づけるべき重要な源です。

4）子ども・若者の希望（小さな芽が示す未来）

ブロックによって差はあるものの、子どものミサ参加の微増、堅信準備講座の合同開催、若者への意識的な呼びかけが、前向きな反応を生みました。数の上ではまだ小さな変化であっても、「声をかければ応答がある」「場を整えれば集まる」という事実は、次世代司牧の可能性をはっきりと示しています。

特に、世代や小教区を越えた取り組みは、若者にとって教会を「閉じた世界」ではなく、「広くつながる共同体」として体験させる契機となります。これらの小さな芽を根気よく育てていくことこそが、短期的成果よりも長期的視点に立った宣教司牧の重要性を私たちに教えています。

以上の4点に共通しているのは、「人がつながるとき、教会は生き始める」という明確な実感です。京都教区は今、「活動を増やす教会」ではなく、「人が育ち、関係が深まる教会」へと歩みを進めるべき転換点に立っています。

Ⅲ.『十分に組み組めなかった事』（現状の限界と、次の一步への必然性）

1) 教会は小さくなっているが、関係は深まっている

信徒数の減少や高齢化により、教会の「規模」は確実に縮小しています。しかし同時に、顔の見える関係や相互理解を深めることができます。これは衰退ではなく、教会の姿が「量」から「質」へと移行している過程と理解することができます。

問題は、この変化を意識的に受け止め、関係の深まりを宣教の力として生かし切れていない点にあります。小さくなったからこそ可能になる「寄り添い」「分かち合い」「支え合い」を、教会の新しい強みとして再定義する視点が、まだ十分に共有されていません。

2) 担い手不足と役員の固定化（善意に依存する体制の限界）

多くの小教区で、同じ人への依存、役員の固定化、高齢化が進み、新しい試みを生み出す余力が失われつつあります。これは個人の責任ではなく、教会構造そのものが、長年の善意と献身に支えられてきたことの限界が表面化している状態です。

担い手が固定されることで、「変えたいが変えられない」「分かっているが手が回らない」という組織疲労が蓄積し、結果として宣教の停滞を招いています。

この状況を打開するには、個々の努力を求めるのではなく、役割の分散、関わり方の多様化、短期・小さな奉仕の導入など、参加のハードルを下げる構造転換が不可欠です。

3) 若い世代の定着難（「来てもらおう教会」から「居続けられる教会」へ）

子どもや青年の参加が限られ、中高生会などが機能停止している現状は、教会が若い世代にとって「一時的に来る場所」にはなっても、「居続けられる場所」になっていないことを示しています。青少年の行事やイベントは実施されていても、持続的な関係づくりへと結びついていない点が大きな課題です。

若い世代は「内容」以上に、「関係」と「安心感」を求めています。このため、行事中心の司牧から、少人数での継続的な関わり、世代を越えた交流関係、失敗や不在を許される空気へと転換していく必要があります。これは若者の問題ではなく、教会全体のあり方が問われている課題です。

4) 宣教の方向性の不透明さ（行事は続いているが、目的が共有されていない）

多くの教会で年間行事は途切れることなく実施されていますが、それらがどの方向を目指しているのかについて、信徒間で十分に共有されているとは言えません。その結果、「前年踏襲」が目的化し、行事が宣教の手段ではなく、維持すべき作業となってしまう傾向があります。

今求められているのは、新しい行事を増やすことではなく、「なぜこれを行うのか」「誰と何を目指しているのか」を共同体で識別し、共有することです。

方向性が明確になれば、行事は減っても意味は深まり、担い手の負担軽減にもつながります。

5) 多文化共生の次段階（「一緒にいる」から「共に決める」教会へ）

外国籍信徒の参加は着実に進み、共に祈り、奉仕する関係は各地で育まれてきました。しかし多くの場合、その関わりは依然として「参加する側」とどまり、教会の意思決定や方向づけに主体的に関わる段階には十分至っていません。これは、「共に集ってはいるが、共に教会を形づくっている」とは言い切れない状況であると言えるでしょう。

外国籍信徒との共同体づくりを次の段階へ進めるためには、外国籍信徒を「助けられる側」や「支援の対象」として位置づけるのではなく、日本人信徒と同様に、教会を共に築いてい

く仲間として受けとめることです。そのとき初めて、協力関係は一方向的な「支援」から、相互的な「交わり」へと深まっていきます。この歩みは「異文化間の交わり（intercultural communion）」へと進むことです。

IV. 今後に向けた重要な問い（方向転換を実現するための焦点）

1) 行事を「経験」で終わらせず、日常の信仰生活につなげるには

行事をただの経験で終わらせるのではなく、日常を変える力へと結びつけましょう。巡礼やイベントは、祈りを深め、人間関係を育みます。行事の事前の準備と事後の分かち合いを通して、特別な出来事を信仰生活の糧へと転化することこそ、私たちの共同体を成熟させ、宣教司牧の基盤を強める道です。

2) 担い手を「探す教会」から「育ち合う教会」へどう移行するか

限られた人に役割を集中させる体制から、関わり方の段階化や、短期・部分的な奉仕を認める体制へと転換する必要があります。担い手（役員など）は最初から完成された存在ではなく、関わりの中で育ち、共に学び、分かち合う存在です。そのため、小教区評議会の役員研修会・交流会を活用してください。

3) 教会のあり方を次の段階へ（「守る教会から、共に担う教会へ」）

今、京都教区に求められているのは、歩みの中で見えてきた限界を引き受け、教会のあり方を次の段階へと移していく決断です。それは、「守り続ける教会」から「共に担い直す教会」へ、そして「続けること」自体を目的とした司牧から、「人が育ち、関係が深まる」ことを中心に据えた司牧への転換です。

この転換を先送りすれば、限られた担い手への負担はさらに集中し、疲弊と停滞は深まっていきます。しかし、完成形を待つのではなく、小さな一歩を踏み出すならば、教会は再び希望の巡礼者として歩み続ける共同体となることができます。これこそ、京都教区が行う「共同宣教司牧」とシノドスの教会づくりの歩みです。

4) 『希望の巡礼者』を、生活と行動でどう可視化するか

『希望の巡礼者』というテーマは、聖年の終わりとともに消える標語ではありません。むしろ、互いに支え合い、弱さを分かち合い、共に歩み続ける姿の中で生き続けるものです。小さな祈りの集い、対話の場、奉仕の積み重ねを通して、教会が地域と社会の中で希望のしるしとなる道が今、私たちに問われています。

V. 全体まとめ

これらの問いは、新しい計画を作るためのものではありません。京都教区がこれからも歩み続けるために、何を大切にし、何を手放し、誰と共に歩むのかを見極めるための問いです。答えは一度に出るものではありません。しかし、問いを共有し、対話を始めること自体が、すでに『希望の巡礼』の第一歩です。今こそ、『霊における会話』も実践しつつ、祈りと対話を始め、共に歩む第一歩を踏み出しましょう。

以上。